

Title	スペイン語における複数形成について
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 30 p.1-p.14
Issue Date	1974-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80503
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スペイン語における複数形成について

出 口 厚 実

Sobre las reglas para la formación del plural español

Atsumi DEGUCHI

En las líneas que siguen se va a replantear desde un nuevo ángulo la cuestión de la formación del plural español, la que ha sido objeto de controversia entre lingüistas tales como Sol Saporta, James Foley, Mario Saltarelli, James Harris y Dagmar Knittlová. Aunque los análisis presentados por éstos difieren entre sí, en general sus argumentos resultan casi insostenibles en vista de que no han logrado explicar de una manera convincente la razón de ser de las reglas propuestas.

También es vulnerable el caso omiso que todos han hecho al fenómeno de la vacilación de uso cuando se trata de los nombres acabados en vocal acentuada.

En este artículo el autor va a proponer el concepto de “meta fonológica” de la pluralización y subrayar la importancia de las “restricciones o condiciones fonéticas superficiales” propias de la fonología española.

0) Introducción

スペイン語屈折形態論の中で実詞の複数形成過程は比較的単純に見え魅力に乏しかったためか最近まで独立した研究対象として取り組まれることは殆どなかったようである。この空白を埋めたのが、数年前、Language 誌上を中心に Sol Saporta (1965), James Foley (1967), Mario Saltarelli (1970), James W. Harris (1970), Dagmar Knittlová (1970) の間で展開された論争である。そこには目新しい興味深い提案も見られたが、全体として、この問題は‘複数形成’という文法の一小領域内で論じ尽される事柄ではなく、特定の提案や批判の当否を問うには文法全体を視野に収めた分析に立脚せねばならないことを教えた。小論では、実相の解明に有力な手がかりになると思われるデータの存在が諸氏の議論に十分考慮されていないことを指摘すると同時に、別の角度からスペイン語における複数形成法を見直し、いくつかの論点に対し考察を加えたい。

前述の論争は、ごく大ざっぱな整理の仕方をすれば、次のようになるだろう。Saporta の論文はスペイン語の複数形成をテーマにしたものではなかったが、たまたま、伝統的に行なわれてい

る複数形成法を一覧表的な規則の形式に簡約表現した。それは基本的には Item and Arrangement 方式を踏襲したものであった。Foley は生成音韻論の立場から Saporta の示した規則を批判し、複数化規則そのものは極限まで単純化して、一連の音韻規則でもって複数形成の過程を説明しようと主張した。Foley の唱える apócope 説に反論し、それに代るべき別の規則 epéntesis の必要性を説いたのが Saltarelli である。Knittlová は Foley の議論の不毛性を突き結果的に Saporta などの伝統的な考え方に立った。一方、Harris は Saltarelli の説に反駁し Foley を支持する論拠を展開した。ここでは更に具体的な細かな対立点に論及する余裕はないが、5 氏の争点の中で本稿の論旨と特に関係が深いのは次の 3 つである。

1. 複数標識は -s (Foley, Saltarelli, Harris) か {s~es~ø} (Saporta, Knittlová) か?
2. apócope 説 (Foley, Harris) か epéntesis 説 (Saltarelli) か?
3. café+s (Harris) か café+es [o café+e+s] (Foley, Saltarelli) か?

これらの二者択一のどちらを採るべきか又その根拠は何であるかを明らかにするつもりであるが、基本的な立場は以下のとおりである。複数化過程を解明するには、ただ単に単数形と複数形を対照して両者の間の構造の違いを出来るだけ経済的に記述するだけでは不充分であり、その構造変化の中で全く予測不能な‘複数化’に固有な特徴と、スペイン語文法に見られる他の一般的現象に関連づけて捉えうる部分とに正しく分離する必要があると考える。在来の‘屈折’の概念はこの境界線を明確にしていなかった。スペイン語音韻構造上の諸々の条件が語形変化の一種である屈折と密接な係わりをもつことは言うまでもない。しかし Foley (1967), Harris (1969; 1970) に見られるように、複数形が作られる際の形態音韻変化をすべて‘音韻’規則の支配下に入れ、純粋に音韻的な条件の下で起こる現象と等質的に扱うやり方には直ちに賛成し難い。このスペイン語複数化の検討を通じて、筆者は、形態音韻規則は同一の音韻部門に属すとしても機能上何らかの区別がなされるべきではないかという考えに傾いている。両者の関係は、語レベルでの音声出力条件の存在とも絡んで、形態音韻プロセスの分析を左右する基本的な課題であり、今後更に追求されなければならない。

1) スペイン語における名詞・形容詞の複数形は音韻形態上その語尾に s をもつのが特色である。もっともそのことは直ちに《複数》が常に s で表わされることを意味しない。複数形態素がどのような形態 (morph) で実現されるかについては幾通りかの見方がある。例えば R. A. Hall Jr. (1945) のスペイン語屈折の記述の中で複数形成は次のように分析されている。

(1) スペイン語実詞の複数形は -s 又はゼロの接尾辞添加によって形成され、実詞は 2 種類に区分される。

I. 接尾辞 -s で形成される複数

A. 語幹変化なし : kása-kásas, etc.

B. 語幹変化あり : -s の前に -e- の付加 : flór-flóres, més-meses

II. 接尾辞ゼロによって形成される複数即ち単数形と同一: xuébes-xuébes

一方、彼は注記において次のようにも述べている。

- (2) 容易に規定可能な音韻的条件の下で -s と - ϕ とに交替する -es を基本的な複数語尾とみなすこともできよう: 無強勢母音の後で -s, 無強勢 -Vs の後でゼロ, e. g.: diós-es, rubí-es, día-s, lunes-()。

前者の分析は複数形態素としての -s, - ϕ 2つの異形態と -e- を挿入する過程を認める。(2)は -s, -es, - ϕ の3異形態が複数形態素を構成するという考え方である。 ϕ 異形態を単数・複数間の形態的同一性, あるいは複数形成規則の非適用という意味にも拡大解釈するならば,(2)の分析法は, 方法論の違いを越えて, 従来から最も広く支持されてきたものと言えよう。伝統的な文法の延長線上にある R. Seco(1966: p. 21), M. Seco(1972: p. 139) を始め, 形態素に分析する J. García López & C. Pleyán (1969:sin paginación), R. Cerdá (1971: p. 190), B. Pottier (1972: pp. 94—95), 句構造規則文法の例示として与えた O. Kovacci (1971: p. 192), 音形素性で表示された R. J. Di Pietro (1971: p. 153), 変形文法に基く R. L. Hadlich (1971: p. 199) などはいずれも小異を除いて上述の -s, -es, (ϕ) を《複数》の標識とみている。

論争の発端となった Saporta (1965) はカスティリヤ語の複数を表わす規則として^{注3}(3)を示し

(3)

$$Pl \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} s/\{\check{V}\} \text{ — } (a) \\ \phi/\check{V}s \text{ — } (b) \\ es/\{\check{C}\} \text{ — } (c) \end{array} \right\} \quad [\text{where } \check{V} \neq \acute{e}]$$

たが, これも \acute{e} の処理が異なる点を除けば, Hall の(2)と平行しているし, 古くから Academia (1931) にも現われている複数形成規則と一致する。

2) Foley (1967) は Saporta の規則(3)を, although this rule works, it is no more than a convenient summary of the data と評した。例えば(3)は何故, s が強勢のある e の後で生起し, 強勢のある a, o, i, u の後では起こらないのか, 何故 s が無強勢母音の後で起こり, 子音後には現われないのか, etc. 即ちどうして(3)で示される現象が起きるかを「説明」しないと彼は指摘する。この批判が当たっているか考えるか失当と一蹴するかは各人の立場によるけれども, 筆者は真剣に取り上げるべき問題提起として受けとめる。

(1)で s $\sim\phi\sim$ es の交替を規定しているのは形態語彙的 (morpholexical) な要素ではなく, 音韻的な環境だけである点に注意しなければならない。変異体の出現が純粋に音韻的に条件づけられている事実は, 単に複数形態論の枠内で片付けられる現象でなく, スペイン語音韻論の一般的規則と何らかの関係がある可能性を示唆する。従って「説明」を求めるべき場所はこの音韻論にありそうだと思う。この面を追求せず(1)(2)(3) etc. に止まる分析は, たとえ誤りではないにせ

よ、低い評価しか与えられない。

3) Foley は(3)を否定し、この規則で表わされる事実は他の理由でスペイン語文法に必要な既存の規則によって説明できると主張する。そして、結局、複数化規則を(4)の式に単純化してしま

(4) $Pl \rightarrow s$

う。Saltarelli も(4)には異論を唱えていない。《複数》があらゆる場合に一つの形態で現われることを定める規則(4)は確かに(1)よりもずっと簡潔で一般性が高いと言える。それでは(3a)の環境条件や(3b, c)の \emptyset , -es はどのようにして要らなくなったのだろうか？ (3b)の $\emptyset/\check{V}s$ ——は後回しにして、まず(3a, c)の部分から見て行くことにする。

Foley によると、flores は flore-s と分節され、複数形に出現する e は複数形態素の一部ではなく、実詞語幹の一部を成す。つまり flor の基底形 (underlying form) を FLORE とみなす。しかし一方では単数形 flor を導くために後約 (apócope) 規則(5)を新たに文法に加えねばならな

(5) $\overset{\text{注4}}{e} \rightarrow \emptyset/V(C)\text{---}\#$

い。この分析を支える根拠として Foley が強調するのは、(4)の簡潔性に加えて、次の2点である。

FLORE, PAPELE, RAZONE, BAJAE, AZULE, etc. を実詞の基本形態と仮定すれば強勢規則が(6)に示されるように簡単になる。(6)が(5)よりも先に適用されるよう配列すると、すべての

(6) $V \rightarrow \check{V}/\text{---}C_0^n V C_0^n \#$

実詞の終りから2番目の母音に強勢が指定されるだけで足り、語末が子音であるか母音であるかによってアクセントの位置を別々に付与する労力が省ける。更に $\overset{\text{注5}}{\text{bajá, café}}$ のように強勢位置の不規則な語も(6)でBAJÁE, CAFÉE となるので辞書項目の中で例外として記録される必要がないと主張する。尚、CAFEE の基底形に複数 s が付加されると CAFEES が生じるが、これは(7)の縮約・短化を蒙って cafés に変えられるという。

(7) Contraction

$[X] [Y] \rightarrow \left[\begin{smallmatrix} X \\ +\text{long} \end{smallmatrix} \right]$ when X is not different from Y

Shortening

$[] \rightarrow [-\text{long}]$

第2は、形態素末位における $k \rightarrow s(\theta)$ の歯擦音化現象を扱うのに好都合である点である。例えば voz と vocal は明らかに同一語根に関連づけられるが、両語の基底形としてそれぞれ BOK-E, BOK-AL-E を設定すれば、単数の BOKE, 複数形 BOKES が(8)の Assibilation を受けた後

(8) $k \rightarrow s/\text{---}\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\}$

BOSE, BOSES と変わり、前者は更に尾音消失規則(5)の適用で正しく [bos] の音形が得られると述べる。

Foley (1967) の論文には‘簡潔な規則’ (simpler rule) への指向が随所に見られ、文法規則の評価規準に簡潔さ (simplicity) をかなり重視していることが読みとれる。そこで Foley の提案が果してスペイン語文法に相当の単純化をもたらすものかどうかを念の為調べてみたい。

FLORE, PAPELE, etc. の仮定によって強勢規則に対し何個かの記号が節約できるし、複数化規則においても数個の記号を不要にすることは事実である。反面、後約規則(5)が新たに要求される他、oxítono (agudo) の語彙項目の殆どすべての語末に e を加えねばならない。これは音形素性で表わせば各々の語に少なくとも数個の記号を追加することになる。仮に文法に用いられる記号の総数を simplicity の目安とするならば、Foley の処理法はむしろ文法全体に複雑度を増す筈である。文法規則の単純化のためには Lexicon に甚大な負担を強いることも許されるのだろうか。しかし、より根源的な問題としては、文法の一部門を簡潔にすれば他部門が複雑にならざるを得ないとき、‘簡潔性の尺度’でもって文法の優劣を問うこと自体が矛盾しているのではないかということである。

flor の複数が flors でなく flores で、bajá の複数が bajás でなく bajaes である理由を、Foley の分析は本当に‘説明’しているのだろうか？ casa と flor の複数形成の方法(9)を見る

(9) a. casa → casas

b. flor → flores

とき、直観的に、両者では複数形のでき方が少し違うことに気づく。casa/casas には s を指標^{注6} (marque) とする欠如の対立 (opposition privative) が、flor/flores には es を指標とするそれが観察される。それ故、説明しなければならないのは何故、複数語尾に s と es の相違があるのか、換言すれば -e- はどこから生じるかという疑問である。ところが Foley は(10)のように a,

(10) a. casa → casas

b. flore→flores

b 共に複数形は全く同じようにできると分析し、flore が(5)の apócope によって flor となるが casa はそのままである点が異なるとする。つまり Foley の説明しているのは casa と flor における単数のでき方の違いである。これは明らかに言語直観に反する捉え方と思われる。尾音消去規則が FLORES を対象にせず E を脱落させない理由は音韻的に説明がつく。しかし単数形における語尾音 e の消失 (FLORE→flor) は歴史的変遷を反映しているとは言え、共時音韻論にとっては何ら必然性のないものである。

実質上の‘単数化規則’である(5) apócope には他にも問題点がある。(5)の適用条件は完全に音韻的とは言えない。そのため Foley は区別素性 (diacritic feature) [± native] を導入し、マイナス指定の語は ě apócope を蒙らないよう制限する。区別素性の設置を前提にしなければならぬ規則自体に対する疑問の他に、[± native] による語彙の分類規準もあいまいで、種々の困難が生じる。例えば cauce はラテン語から通常の音韻変化を受けて生まれた [+ native] の単語であるが *cauz とはならない。apócope 規則を block するためにはこの語に [- rule (5)]

を記し例外扱いするか、CALKE のような基底形又は ad hoc な CAUCEE の基底形を想定しなければならないだろう。base, clase, especie, vale, etc, が後期の借用語である故 *é* apócope を適用されないとするならば, juventud, longitud, locuaz, vivaz などの語もラテン語から採り入れられたもので〔- native〕に分類されなければならないが実際は後約規則の適用を受けて *e* を失う。又 ele, ene, ese は〔- native〕の語なのだろうか？非ラテン系の借用語も当然〔- native〕に指定される筈だが(5)で尾音を消失する：アラビア語系の algodón, almacén 仏語系の billón, jirón, jardín, etc.。おまけにこれらのケースでは歴史的に裏付けのない ALGODONE, JIRONE……etc. が underlying form とされる。

強勢規則の面でも Foley が評価するほどの簡略化（…強勢の位置はスペイン語語彙の大部分に対しもはや辞書に記される必要がなくただ一つの規則によって予測される）をもたらすかどうか疑わしい。café, baja など強勢母音で終る語が casa, libro と同様の処遇を受け同じ位置に強勢を付与されることは、これらが一般のアクセントパターンに外れた例外的存在である事実を陰蔽する偽りの一般化である。café, papá, mamá 等、完全にスペイン語としての市民権を獲得したように見える語が存在することは確かだが、実詞に対しては -V# はあくまで例外グループを構成するとみなす方が自然に思われる。更に árbol, lápiz, joven 等、子音で終りながら paroxítono (grave) である多数の語は Foley の説に従って基底形として ARBOLE, LAPICE, JOVENE, etc. を設けたとしても、どのみち主強勢規則でアクセントを規定することはできず、これらの場合、語尾に -e を仮定するのは専ら複数化のためであり、徒に辞書を複雑にするのみである。

(8)の歯擦音化規則をスペイン語共時音韻論の中に必要な規則とみるか否かは、他の類似した多くの音韻規則と同様、屈折や派生形態論を扱う上で極めて重要な結果をもつ。これらの問題に関しては筆者は未だ決定的な答えを見い出さないでいる。しかし現在のところ、この種の規則に懐疑的であり、例えば(8)の Assibilation は共時体系に化石化して姿を留める歴史的音韻変化の残影であって、本論でこれから取り上げようとする形態音韻規則と全く異質のものと考える。いわば、既に死に絶えて機能を停止した通時規則を現に活動中の共時規則の体系と別個に捉えようとする態度を保持する。Foley や Harris の立論にはしばしば歴史的事実への言及があり、それを evidence とする例が多いが、上に指摘した通り、通時変化と矛盾する分析も少なくなく首尾一貫していない。

2) で Foley の Saporta に対する批判を是としたが、彼の具体的提案, apócope 説は以上の諸点から支持できない。

4) 複数形 flores の語尾に発見される *e* が複数形態素の一部でなく、単数形語幹の一部でもないとすれば、Hall (1945) の(1)に示唆されるように、-e- を挿入するプロセスを仮定するのが最も自然な解決策である。この考え方は Agard (1967 : pp. 160—161) にも部分的に応用されていて、子音で終る paroxítonas は基本形末尾と接尾辞 *-s* の間に /e/ が挿入される。Saltarelli (19

- (11) $\text{arbol_s} \rightarrow /árboles/$
 $\text{facil_s} \rightarrow /fáciles/$

70) は更にこれを子音及び強勢母音を末尾とするすべての語に拡大し、次のような epéntesis 規則に定式化して、Foley の apócope 説に反論した。彼に従えば flores, azules, bajaes 等は

- (12) $// \rightarrow /e/ \left/ \begin{matrix} C \\ \check{V} \end{matrix} \right/ \text{---} s\#$

FLOR-S, AZUL-S, BAJÁ-S に(12)の母音挿入規則が働いて導かれたことになる。上の規則は(13)(14)を折りたたんで一つにまとめたものであるが、両者を別々に検討する必要があるだろう。彼は(12)が

- (13) $// \rightarrow /e/ \left/ C \right/ \text{---} s\#$

- (14) $// \rightarrow /e/ \left/ \check{V} \right/ \text{---} s\#$

スペイン語における一般的な音韻現象である根拠として、語頭音添加 (Prótesis) と関連づけ、これらは同一の現象、s の音節化 (s-syllabification) と見る。しかし(15)の prótesis を反転した

- (15) $// \rightarrow /e/ \left/ \# \right/ \text{---} sC$

関係になるのは(12)全体でなく、その部分(13)である。この関係は彼が示唆する notational convention よりむしろ Langacker (1969) で既に提案されている Mirror image convention に従って、一般に就語規則で用いられる式型を利用した表記法の方が簡便である。(13)と(15)は次

- (16) $\begin{matrix} * \# s C \rightarrow 1, e+2, 3 \\ 1 \ 2 \ 3 \end{matrix}$

の鏡像規則 s-syllabification としてまとめて表わされるだろう。この規則は Stress assignment よりも後に順序づけられるので、Harris (1970) の指摘する estoy, estás, etá, etc. の強勢位置を決めるのに支障はない。ここでは強勢付与規則について詳しく論じる余裕はないが、本論はそれが複数形式素の segmentalization [Foley, Saltarelli 流に言えば複数化規則] よりも先行すると仮定する。言い換えれば実詞に対して強勢はその基底形 (=単数) に与えられるのである。従って一般語彙項目が挿入される時点で Pl の代りに -s が同時に挿入されるとはみなさない。以上のような Ordering の仮定は第5節の議論の前提でもある。

スペイン語の単語には音声出力として -CC# なる音連続を忌避しようとする音韻的制約が存在する。(13)の epéntesis はそのような音声構造の出現を妨げるのに一役買っているとの説明ができる。(13)に対する例外は dux, fénix, vals など少数あるが、apócope (5)に比べれば遙かに少なく、その音韻形態は「借用語」であることを明確に示している。(15)prótesis の存在と相まって、これらの点で epéntesis は Foley の apócope 説よりも強固な根拠に支えられている。

ところで Saltarelli は(14)が要請される理由を述べない。 $-\check{V}s\#$ はスペイン語実詞中に、compás, cortés, inglés, marqués, entremés, feligrés, país, revés などに見られる他、z を [s] に発音する方言では、carí[s], vó[s], vivá[s], lú[s], rapidé[s] 等頻出し、 $-\check{V}s\#$ が表面音声構造

上排除せられる傾向があるとは一概に断定できない。だから $\acute{V}-s\#$ の環境に e を挿入する理由は(13)に比べて弱い。Saltarelli は(13)と(14)は規則の構造上共通部分が大きいため { } を利用して一つに合併したものと思われるが、(14)で語幹末の強勢母音と複数標識の間になぜ e が挿入されなければならないかを説明していない。 $C-s\#$ と $\acute{V}-s\#$ は異質な環境であり、等しく epéntesis を受けるというのは一見不自然である。にもかかわらず規則の外形に共通点があればそれらを折りたたむことが正当化されるのだろうか？ この問題については再び7)で取り上げる。

5) 前節及び3) では Saporta の規則 (3a), (3c) に相当する部分、つまり複数語尾 $s \sim es$ の variation が Foley, Saltarelli でどのように処理されるかを見、問題点を指摘した。次に(3b)の \emptyset 形態の扱い方を調べ適切かどうか検討したい。Foley によれば lunes の複数形は(4)により複数標識が挿入された後、強勢が付与され(8)の縮約・短音化規則で語尾子音が $ss \rightarrow \overset{\text{註7}}{s} \rightarrow s$ と変化して lunes となる。Saltarelli では LUNES・S に(12)が適用されてしまうと実在しない複数形 *luneses (17) LUNESS \rightarrow lúnes

が生ず。これを防ぐため彼は lunes, crisis 等の辞書項目に〔-rule(12)〕の規則素性を付して例外の扱いをする。しかしこの種の語を例外として処理することは賢明でない。何故ならば語尾 $\cdot \overset{\text{註7}}{V}s\#$ で特徴づけられるタイプの実詞は少数グループには違いないが、例外なしに複数化に対して同一の行動をとる。この原因はあくまで語尾が無強勢母音 + s であるという音韻的な事情に求められるべきで個々の語彙項目に帰されるべき不規則ではない。LUNES・S に(12)が適用されない結果、(17)の過程で s が単音化するのとは Foley の方法と同じである。スペイン語で一般に同一音の連続が Contraction, Shortening を蒙ることは確かに事実である。しかしこの音声現象には隣接音節の強勢の有無は関与しない : los soles \rightarrow los:óles \rightarrow losóles; mes siguiente \rightarrow més:i-giente \rightarrow mésigiente。また注意深い発音では長子音と短子音の対立を生ぜしめることもできる : los soles, (los:óles) / los oles (losóles)。ところが単数語幹末 s + 複数 s の場合、-ss の直前母音にアクセントがない時のみ起こり、més・s などの語は(7)を適用されないよう \ddot{e} epéntesis で e を挿入されている。重音縮約という音声学的説明にたよるならば més・s は *més に変化しても不思議でない筈である。通時的事実に訴えようとしても、複数形の $ss \rightarrow s$ 短縮化については立証に窮するだろう。又、現在、いくら慎重に発音されたとしても lunes の語末 S に、単数一複数の間で short/long あるいはその他の音韻的対立を生ぜしめることは不可能である。このような点から縮約・短音化による説明には無理がある。

Foley, Saltarelli 両者は文法カテゴリー《複数》がその形態音素の matrix に綴り換えられる過程を複数化と見ている。従って Saporta のように \emptyset 異形態を設定することは規則を複雑にするとして嫌われ、別の根拠によって必要とされる Contraction-Shortening^{註8} に便乗させる巧妙な手法で解決した。記述的にはこの方法が最も簡潔かも知れない。しかし筆者は LUNES・S \rightarrow lunes 説, lunes + $\emptyset \rightarrow$ lunes 説のどちらでもなく、むしろ複数形成規則の非適用が lunes, crisis など

の複数語形の出現を許すと見た方がよいのではないかと思う。非適用の原因には2通りの考え方ができる。一つは複数接尾辞セグメントを導入する変形がこれらの語に対して適用されなかったため、《複数》を表わす独立の接辞セグメントが欠如しているので複数化が出来ないとする解釈である。これに対し Segment transformation は〔+plural〕のすべての実詞に行なわれるが、複数化規則 (i.e. s の導入) は $\check{V}s\#$ の語には block されるとみる方法もある。どちらが正しいかここで結論を下すのを差し控えるが、 $\check{V}s$ で終る実詞には複数化規則は適用されないと認める。即ち $\check{V}s+s$ なる派生段階は存在せず、このタイプの語の複数音韻的に始めから終りまで単数と同音形式に留まる。Pluralization が常に働いて形態素 Pl がいつも一定数の(異)形態に実現されるとする考え方よりも、規則の適用がある条件下で停止すると見る方が合理的で、且つ現象の本質を捉えているという根拠を次に示そう。

(12) epéntesis を受けた後の段階でスペイン語の複数実詞は例外なく語尾 $\check{V}s\#$ を示す事実に注意を向ける必要がある。つまり複数形成に関与する諸規則は、単数語形の如何にかかわらず $\check{V}s\#$ を複数の最終語形として生ぜしめる方向に働いている。単数形が $\check{V}s\#$ である lunes, crisis 等一連の語は既に音形的に複数の出力条件を満たしているが故に、そのまま複数形として機能し得るとみなすことは不自然ではない。 $\check{V}s$ を語尾とする実詞が例外なく単複同形である事実、逆に単複同形の語は、近年に採り入れられた少数の借用語を除いて、 $\check{V}s\#$ 形の実詞に限られていることはそれを裏付けている。以上のような関係を図示しようと試みたのが(18)である。

(18)	sg. 語境界	pl. 語境界
a 群 : flor, bajá, etc.	$-VC_0^a$	$\check{e} \quad s$
b 群 : casa, etc.	$-VC_0^b$	$\check{V} \quad s$
c 群 : lunes, etc.	$-VC_0^c$	$\check{V} \quad S$

図で明らかなように単数形語尾の音韻形式は強勢の位置を含め一定していない。しかし複数形ではどの語彙群も $\check{V}s$ で終る。このように複数形成の音韻的側面は凸凹な単数語境界 | を均質で真直ぐな || に平準化することである。c 群は元々 || を満足させる音形を示すので変化を蒙らない。そこで $\check{V}s\#$ を実詞複数形成における音韻的目標と考えることができる。S 以外の最右の子音より後の語幹の長さが ‘短い’ A 群には ‘長い’ 語尾 $\check{e}s$ が、語幹の ‘長い’ b 群には ‘短い’ 語尾 s が付加され、a, b 群の語幹と語尾を加えた長さの幹幹をもつ c 群には語尾が添加されない。西語の複数形成には、 s を除く最後の子音後の語幹の長さや接尾辞の和及び両者によって合成される音形を一定に保とうとする興味深い現象が見られる。

6) さて mamá, papá etc. は複数形 mamás, papás を持ち Saportaの規則(3)でも, Saltarelliの体系でも又前節で見た ‘複数形成の目標’ によっても説明できない。Foley は bajá の基底形を BAJAE, mamá の基底形を MAMÁ と設定することで両語の複数形の相違は簡単に処理で

きと言う。ところで $\acute{V}\#$ 語尾の実詞は殆どすべて借用語である事情も手伝って、古い時代から複数語形の動揺・変異が少なくない。例えば Harris (1969 : p. 182) も *bajaes*, *hindúes* に関して, *bajás*, *hindús* の方が自然だとするメキシコ人 informant の判断を取り上げて、母音後にも \acute{e} apócope を認める Foley に疑問を表明している。Academia (1931 : p. 18) に引用される古語 *maravedíes*, *maravedís*, *maravedises* の例に限らず、 $-\acute{V}es \sim -\acute{V}s$ の自由変異はしばしば見られる。R. Seco (1966 : p. 21), Haensch (1972 : p. 9) などは、強勢母音で終る名詞に $-es$ を付加する規範文法にもかかわらず、最近の特に口語の用法は $-\acute{V}s$ を好む傾向にあることを指

(19)	<i>aes</i>	—	<i>as</i>	<i>hindúes</i>	—	<i>hindús</i>
	<i>alelías</i>		<i>alelís</i>	<i>jabalías</i>		<i>jabalís</i>
	(<i>bajaes</i>)		<i>bajás</i>	<i>manías</i>		<i>manís</i>
	<i>bambúes</i>		<i>bambús</i>	<i>maniqués</i>		<i>maniquís</i>
	<i>bisturías</i>		<i>bisturís</i>	<i>rubíes</i>		<i>rubís</i>
	<i>colibrías</i>		<i>colibrís</i>	<i>tisúes</i>		<i>tisús</i>
	<i>esquíes</i>		<i>esquíes</i>	<i>zulúes</i>		<i>zulús</i>
	(<i>fricandoes</i>)		<i>fricandós</i>			

摘する。(19)のリストに列挙される $-\acute{V}s \sim -\acute{V}es$ の間を揺れる不安定な複数形と、他方, *mamás*, *papás*, *rajás*, *sofás*, *capós*, *chacós*, *dominós*, *gachós*, *menús*, *pirulís*, *cañís* など $-\acute{V}s$ 形のみを有し $-\acute{V}es$ を認めない語形との関係をどのように把握すればよいのだろうか？ 標準カスティリヤ語では既に固定した複数形をもつ語彙が2～3種の variation を示す方言もある。例えば Luis Flórez (1965 : p. 46 & p. 214, 1969 : p. 102) は Colombia の Santander 県及び Norte de Santander 県で話される西語における次のような複数形の変異を報告している。

(20)	<i>ajís</i>	—	<i>ajíes</i>	—	<i>ajíses</i>
	<i>café</i> s		<i>cafees</i>		<i>cafeses</i>
	<i>mamá</i> s		<i>mamaes</i>		<i>mamases</i>
	<i>papá</i> s		<i>papaes</i>		<i>papases</i>
	<i>pie</i> s		<i>piees</i>		<i>pieses</i>
	<i>yis</i>		<i>yíes</i>		<i>yises</i> (jeep の pl.)

Saporta, Foley, Saltarelli, Harris は(19)にみられるデータを殆ど考慮に入れていないし、又実際彼らの提案はこの現象の解明には無力である。Foley, Saltarelli は *papá*, *mamá* のような語を関連規則の例外として指定するか、 $\acute{V}es\#$ タイプの語とは基底形で異なるようにしておく。 $-\acute{V}s\#$ 実詞と $-\acute{V}es\#$ 実詞を語彙レベルで分類し、その差を各語彙に固有な特徴に帰してしまうこのやり方は、例えば何故 **sofaes* が生まれず、何故 *bambúes* \sim *bambús* の変動が起こるのかを全く説明せず、分析を放棄する事に他ならない。単数で $-\acute{V}\#$ をもつ実詞の大多数が(19)のような

variation に巻き込まれることからして、これは語彙的な例外素性に帰因するのではなく、むしろ音韻論上の理由によるのではないかと小論は推定する。

Knittlová (1970) は音韻的説明を試みている。彼によると papá, mamá, sofá などの語が今日では『アクセントを無視して単に母音で終る native word と感じられるので “casa” と同様に複数化される。“esquies”-“esquis” のあいまいさは進行中のこの同化過程の典型的な例である。』換言すれば、現在、epéntesis (12)のうち(14)で示される部分を脱落させ、規則(13)へ移行しようとしている段階にあると主張する。又は(13)は義務規則であるが、(14)の義務度は次第に低下してきており、消滅しかかっているとの解釈も出来よう。以上のように「推移」を持ち出して説明するにしても強勢母音後に e を挿入する規則(14)はやはり必要である。(19)表の中で -Vs 形だけしか生成しない文法は完全とは言えず、また -Ves 語尾の複数のみを許す語も若干ながら存在する：berbequí, borceguí, iraní, israelí, pakistaní。結果的に複数化の際 -Vs と -Ves を同等に扱う傾向があることは認められるが、これは Knittlová の言うとおり、強勢の存在を無視したためであるという証拠はない。また同化の条件が借用語の帰化の度合によるという語彙的な性質のものとも思われない。Vs 形だけで現われる実詞の V は é, á, ó が大部分を占め、Ves 形で用いられる語は V が i に限定される。一方(19)表の、-Vs~Ves 間の動揺が起こる不安定な実詞では V は殆んど ^{註10}ú と i である。従って強勢非高母音を語末に持つ実詞は複数語形 -Vs# をとり、強勢高母音で終る語は -Ves# か -Vs# に複数化されると一般化できる。

7) これまで見て来たように圧倒的多数の実詞は複数形で -Vs# なる音韻形式をもつ。そこで -Vs# を複数形成における目標とみなすことで lunes などの複数語形の存在が容易に説明されることを5)で明らかにした。4)では V—s# の環境に e を補う規則(14)の根拠に疑念を示したが、〔+plural〕を指定された実詞は -Vs# を音声出力として課せられていると考えれば、その存在に納得がゆく。(14)には(13)の如く、表面音声構造上許容されない音連鎖の出現を未然に防ぐ機能はないが、(13)と協力して複数形を -Vs# の音形に実現するという共通の効果を発揮しているのである。この点から見れば両規則を(12)の形に一本化して表記することもあながち不当とは言えない。

この複数形成の目標にもかかわらず papás, sofás etc. に -Vs# の語形が生じ、このタイプの勢力範囲が大きくなりつつあるのは何故だろうか？ スペイン語では -Vs# の中でも、e の前に強勢母音立つ -VVs# は -CVs# に比べて非常に稀にしか起こらない。-áes#, -ées#, -óes#, -úes#, -ies# はいずれも動詞屈折の中に発見される音連続であるものの、実詞語形としては殆ど見当たらない。^{註11}ただし -VVs# が動詞語形以外で忌避の対象になっているわけではない。caos, seis, lúes や複数名詞形 ríos, vías, púas, grúas, seos, teas, boas, coas, vahos etc. が多数存在するからである。従って -Ves# はスペイン語の音韻構造上不可能な音結合ではないけれども、実詞語形としては事例が少なく、消極的な反面目標 (negative target) になっていると見る方がよい。

一方 -Vs# は一般の形態 -Vs# と異なり、複数語形としては「好まれない」筈の音形である。

しかし4)で見た通りこの語尾形式、とりわけ $-és\#$ は実詞にかなり普通に見られるものである。複数語形 $-Vs\#$ のうちで *cafés, canapés, corsés, pies, tés* など $-és\#$ が最も安定しているのは恐らくこのような音韻構造上の理由によるのであろう。 $-és$ が突破口となって一般に $-Vs$ を許容する道が開けたとの憶測も成り立つ。(19)(20)に典型的に見られる $-Ves$ と $-Vs$ の変動は、複数形としての目標構造 $-Vs\#$ に適合する $-Ves$ と、音韻配列の上では $-Ves$ よりも受け入れられ易い $-Vs$ との拮抗に原因し、今日次第に後者が地歩を得ている状況である。語末の s の代りに他の子音を入れ替えた音連鎖 $-VeC\#$ と $-VC\#$ を比較してみればその理由は歴然とするであろう。 $-ál, ár, án, á\theta; -él, ér, én, é\theta; -íl, ír, ín, í\theta; -ól, ór, ón, ó\theta; -úl, úr, ún, ú\theta$ など $-VC\#$ はどれも完全に可能な音韻群であるが、 $-áel, óel, éel, íel, úel, \dots$ etc. $-VeC\#$ は、僅かな例外を除き、スペイン語らしい響きをもつ正常な語とは認められない。前者の音結合群の存在は、 $-Vs\#$ をより自然な語尾形式と感ぜさせる大きな要因である。

(20)に例示される *papases, cafeses, etc.* の方言形や俗語の *pieses, feses, corseses, maniquises* ^{注12} 等の形態はどのようにして生じたのか? $-V$ が複数化され $-Vs$ になった後で再び $Vses$ と複数化されると見る向きもある。しかし $-Vs\#$ は既に見て来たように避けられるべき不安定な語尾ではない。それ故 $-Vs$ から $-Vses$ への2回目の複数形成の動因がなくなる。むしろ次のように考えた方がよいと思われる。*papá* の複数形としてまず、複数形成の音韻的目標に適合する *papae*s が生まれる。ところが $-Vs\#$ が局所的な弱い negative target であるため嫌われ、 \acute{e} epéntesis を適用されないで通常形の *papás* も生じる。 $V\acute{e}$ の2母音連続を積極的に回避するもう一つの手段はこれらの間に子音を挿入することであり、この場合、選ばれた子音が s である。5)の(18)図で実詞の語尾形式の3つの類型を示したが、 a, b, c 各群で C_0^s と表わされている部分で最も普通のタイプは次図のように C_1^s 、即ち子音が1ケで、先行母音に強勢のある $-VC, -VC\check{V}, -VC\check{V}s$ である。子音の epéntesis が要請されるのは(21)図における a^1 群の空隙を埋め、パタンの均斉を

(21)	sg. 語境界	pl. 語境界
a ¹ 群 maravedí, etc.	-V̇ ○ ě s	
a ² 群 flor etc.	-V̇ C ^{...} ě s	
b 群 casa, etc.	-V̇ C V̇ ^{...} s	
c 群 lunes, etc.	-V̇ C V̇ S ^{...}	

得ようとする圧力のためだと理解できる。

以上の考察から、*papá, mamá, sofá* などを(12) epéntesis 規則の単なる例外とみることは不適當だと結論せざるを得ない。また(12)を廃止して(13)と入れ替えることも現状を反映していない。もしそうすれば *marroquíes, israelíes, pakistaníes, etc.* の複数形を作り出すことができなくなるからである。本論は(13)の存在を確認し、(14)を次のように修正する。

$$(22) \quad [] \rightarrow e / \left\{ \begin{array}{l} V \\ +\text{stress} \\ +\text{high} \end{array} \right\} \text{---} s\# \text{ (optional)}$$

この規則は先行強勢母音が á, é, ó の時は適用されないから, MAMÁ·S, SOFÁ·S, CAFÉ·S etc. は影響を受けない。従って Foley, Saltarelli の体系におけるように CAFEES は派生過程に生じないので, (7)の縮約・短化の2規則は複数形成法に関して不要である。BAMBÚ·S, JABALÍ·S, TISÚ·S, RUBÍ·S 等は強勢高母音が最終母音となるので(22)を任意的に適用される。そこで(19)に見られるとおり bambús-bambúes, jabalís-jabalíes, tisús-tisúes, rubís-rubíes の変異が発生するわけである。又 (20)の複数語形を持つ方言の文法は(22)の代りに任意規則として(14)の e

(23) [] → s/ŷ — es# (optional)

epéntesis を有し更に(23)の s epéntesis 任意規則も含むことになるだろう。

8) Final

小論は apócope 説を斥け, 音声出力上の制限と複数形成における音韻的目標の概念を導入することによって epéntesis 説を裏付ける根拠とした。-CC# を忌避する表面音声条件は C—s# の環境に e を挿入する epéntesis の存在理由を説明する。同時にこれは -ŷs# の複数目標にも合致する規則であることがわかる。一方, 強勢母音で終る実詞の複数形に動揺現象があるのは, -ŷes# を弱い negative target とする表面音声制約と複数目標 -ŷs# との抗争の結果であることを指摘した。また -ŷs で終る語の複数形は, -ŷs# 自身が複数派生の目標出力である故, 複数化が適用されないで, 音形的に単数と全く同じ語形をもつ。全体を通して, これまでの分析において語彙項目の個別的特徴として, あるいは例外規則素性として辞書に委ねられていた部分の多くが正常な形態音韻現象として規則化できることを明らかにした。

(1973. 7. 20)

〔注〕

1. 特に断わらない限り, 本論での引用部分のスペイン語は原文通りである。ここでは音素表記による。
2. John Lyons: Introduction to theoretical linguistics, 1968, London の西訳版, John Lyons (1971) の § 5.3.5 Los alomorfos に訳者が付け加えた解説。
3. Saporta の掲げる実際の規則では3つの部分規則 a, b, c が順位づけられていて, 最後の -es が適用されるべき環境は省略されており, ŷ≡é の条件も付されていない。ここではわかりやすくするため環境をすべて明示して無順位で適用可能な形に改変した Foley の引用を利用する。
4. Foley は基底表示で long ē と short ě を区別して, ě の本来の意図は「短い」 e を示すためだが, 本論ではこれらの差は有意義でない故, (3)におけるのと同様, 無強勢の e を表わしているものとする。
5. 基底形に余分な -e を付けておき強勢規則の適用後, apócope でこれを消去する手法は Agard (1967: pp. 158—159) にも見られる。
6. Troubetzkoy の用語。Principes de phonologie p. 77。
7. Ecaterina Goga (1970) によると Nuevo diccionario ilustrado de la lengua española. I—II, Enciclopedia Sopena, 4ª ed, Barcelona 中に54例発見され, 調査対象となった名詞総数の0.25%を占めるといふ。
8. 本論では cafés などを通ずるためには規則(7)の必要性を認めない〔第7節参照〕。一般音声規則とは別に形態音韻過程として同一音連続の短音化規則が要求されるケースがあることは事実である。例えば vivi·is → vivís におけるような ii → i の変化を説明するのに不可欠である。しかしこの規則が(7)の形

- 式で表わされるような一般的な形態音韻規則として存在するかどうかは疑問である。
9. Günther Haensch (1972) も *bajaes* は今日では“anticuado”であると注記している。
 10. 上注9参照。*bajaes* と並んで彼は *fricandoes* も “pedante” として排除する。この2語を除くと、(19)の語はすべて強勢母音 *i* か *ú* を有す。
 11. *z* を [s] に発音する方言では Arbeláez, Báez, García, Narváez, Páez, Peláez, Sáez 等の人名に存在する。
 12. Francisco Trinidad (1969) が Arniches の劇作品中から Madrid の俗語として収録したもの。

REFERENCIAS

- Agard, Frederick B. (1967), *Studies in four Romance languages, Glossa 1:2*, pp. 150—200
- Di Pietro, Robert J. (1971), *Language structures in contrast*, Rowley Mass.
- Flórez, Luis (1965), *El español hablado en Santander*, Bogotá.
- y otros (1969), *El español hablado en el departamento del Norte de Santander: Datos y observaciones*, Bogotá.
- Foley, James (1967), *Spanish plural formation, Language 43*, pp. 486—493
- Goga, Ecaterina (1970), *Observaciones acerca de unos tipos nominales en español, Revue Roumaine de Linguistique XV*, pp. 369—376
- Hadlich, Roger L. (1971), *A transformational grammar of Spanish*, Englewood Cliffs, N. J.
- Haensch, Günther (1972), *Lecciones prácticas de español, Yelmo No. 8*, pp. 7—12
- Hall, Robert A., Jr. (1945), *Spanish inflection, Studies in Linguistics 3, No. 2*, pp. 24—36
- Harris, James W. (1969), *Spanish phonology*, Cambridge, Mass.
- (1970), *A note on Spanish plural formation, Language 46*, pp. 928—930
- Knittlová, Dagmar (1970), *Notes on Spanish plural formation, Philologica Pragensia 13-1*, pp. 47—50
- Kovacci, Ofelia (1971), *Tendencias actuales de la gramática*, 2a ed., Buenos Aires.
- Langacker, Ronald W. (1969), *Mirror image rule I: Syntax, Language 45*, pp. 575—598
- Lyons, John (1971), *Introducción en la lingüística teórica, versión española de “Introduction to theoretical linguistics”*, Barcelona.
- Pottier, Bernard (1972), *Introduction à l'étude linguistique de l'espagnol*, Paris.
- Real Academia Española (1931), *Gramática de la lengua española*, Madrid.
- Saltarelli, Mario (1970), *Spanish plural formation: Apocope or epenthesis?, Language 46*, pp. 89—96
- Saporta, Sol (1965), *Ordered rules, dialect differences, and historical process, Language 41*, pp. 218—224
- Seco, Manuel (1972), *Gramática esencial del español*, Madrid.
- Seco, Rafael (1966), *Manual de gramática española*, octava ed., Madrid.
- Troubetzkoy, N. S. (1947), *Principes de phonologie*, traduit par J. Cantineau, Paris.
- Trinidad, Francisco (1969), *Arniches, un estudio del habla popular madrileña*, Madrid.
- García López, J. y C. Pleyán (1969), *Introducción en la metodología del análisis estructural*, Barcelona.